丹波・丹後地方の蚕糸業と木船衛門

正瑞　千幸

１　丹波・丹後地方の蚕糸業

丹波・丹後地方の蚕糸業は、郡是製糸（現・グンゼ）や丹後ちりめん機業などに支えられ、とりわけ「蚕都」と呼ばれた綾部を中心に、明治から蚕糸業の先進地として発展を遂げてきた。しかし、当初から丹波・丹後地方での蚕糸業が隆盛していた訳ではない。地域の有力者の助成によって京都府北部の蚕糸業は成長したのである。この蚕糸業に関して、木船衛門家文書にも多数史料が見られるため、これらから丹波・丹後地方の蚕糸業における木船衛門の関与を明らかにする。

２　丹波・丹後地域の蚕糸同業組合と養蚕講習所

明治 18 年（1885）全国共進会で京都府の繭が「本会列品中恐らくは粗の魁ならん」と全国最下位の品質であると酷評され、生糸も同様に厳しい評価を受けた。上記を受けて、京都府は同年夏に福知山町（現福知山市）で養蚕製糸集談会を開催し、農商務省が発布した蚕糸業組合準則をもとに、翌年には府内各郡を単位とする蚕糸業組合の設置を実現した。このなかで何鹿郡蚕糸業組合の組合長に就任したのが波多野鶴吉（1858 ～ 1918）である。

波多野は技術者の先進地への派遣、養蚕伝習所の開校など、養蚕・製糸技術者の養成に取り組んだ。その中の一つとして、明治 25 年（1892）からは伝習所の修業生を養蚕教師として各町村に配置し、組合から補助金を交付して養蚕指導を奨励した。波多野は明治 29 年に綾部で郡是製糸株式会社を設立。輸出生糸の生産に力を入れようと製糸機械を府内で先進的に取り入れたことで、丹波地域は機械製糸が主流になっていった。京都府蚕糸業は明治初期の深刻な立ち遅れから後期の急成長という特徴的な動きを示すが、それには郡是が果たした役割が大きい。郡是生産の生糸は明治 33 年のパリ万国博覧会で金牌を受賞し、郡是に集結する丹波・丹後の繭や生糸の品質の高さが示され、「蚕都」と称されるようになった。

丹波・丹後地域における蚕業教育は明治 26 年に開所した京都府蚕糸業組合高等養蚕伝習所を発端とし、明治 41 年に開校した加佐郡立河守蚕業学校と共に、京都府の蚕業教育をリードする存在だった。前者の養蚕伝習所は波多野鶴吉が初代校長として整備に尽力し、その後改称や改組を重ねて現在は京都府立綾部高等学校となっている。同校の蚕業課程は昭和 38 年(1963)に廃止されたが、校章に桑葉が用いられ名残が見られる。

３　木船衛門と蚕糸業

木船衛門が蚕糸業と関わる時期は明治 22 年から大正４年（1915）である。明治 22 年には京都府加佐郡蚕糸業組合議員に当選し（木船衛門家文書 12- ８）、翌年には京都府蚕糸業取締所議員（12- ５）、翌々年には京都府蚕糸業連合組合議員に当選している（12- ６）。また、明治

24年５月26日には養蚕伝習所より月掛金及び蚕袋合計107貫100匁の支払いが発生しており、明治26年に開所した京都府蚕糸業組合高等養蚕伝習所の準備段階から関わっていた可能性が挙げられる。

その後、明治31年５月に設立した京都府蚕糸同業組合では、加佐組合（加佐郡舞鶴町）の発起人となり、同時に組長へ就任した。また、各郡の蚕糸同業組合設立後には京都府蚕糸業同業組合連合会創立委員と評議員に選出され、明治40年12月には波多野に代わって組長に就任している。同会は恐慌のあおりを受け、農村救済・蚕糸国策樹立への要望によって新組織への移行に着手し、昭和７年４月１日に解散式を挙行している。その際には創立以来の功労者へ感謝状・表彰状が贈呈され、故木船衛門も故波多野鶴吉・平野吉左エ門・山崎義丈・吉村伊助と共に感謝状を贈呈されている（９-468)。他にも、明治38年には京都府蚕糸同業組合連合会創立20年紀念式に際して功労を称讃されるなど（９-571)、丹波・丹後地方における蚕糸業の発達に貢献したことは同時代及び後世の者から見て明白だったと言える。

その活動の一つに、城丹蚕業講習所の整備拡張が挙げられる。明治44年に製糸部増築及び移転費について議論が交わされ（12-188)、同年には蚕業講習所所長大島好太郎より原蚕種製造所敷地に関する道路寄付を依頼されている（12-298・303)。また、蚕糸講習所関係移転・新築図面（９-465）や大正年間に作成されたと考えられる城丹講習所改正関連の文書など（９-170 ～ 178)、木船衛門の関与を示す文書が多数伝わる。

以上整理した木船衛門の蚕糸業における取り組みは、石井寛治が定義した関西地方のような蚕糸業後進地帯で1900年代以降急速に発展した「第Ⅰ類型製糸家」の一例として扱うことが可能である。石井は、「第Ⅰ類型製糸家」が資力のある地域有力者によって設立・運営され、優等糸生産のために高性能繰糸機械を用い、内部で養成した女工の長期雇用や地元養蚕家への蚕種配布や養蚕指導を通じて繭質改良に尽力したことを指摘している。ここから、木船衛門を明治期の「第Ⅰ類型製糸家」の典型例として位置付けることが出来るだろう。また、加藤伸行氏は石井氏の論を発展させ関西地方の「第Ⅰ類型製糸家」が品質向上を目的とした蚕糸業規制を積極的に求め､その結果導入された規制によって優等糸生産を達成したことを指摘している。これについては蚕病予防法改正や改正した蚕業法における蚕種製造者資格の限定について相談する書簡が残っている（12-206)。本文書の年代は不明だが、木船衛門が繭質・蚕糸の品質向上に寄与し、丹波・丹後地方の蚕糸業発展を後押ししたと考えることができる。

参考文献

京都府養蚕業組合連合会編『京都府蚕糸業組合五十年史』1935
石井寛治『日本蚕糸業史分析』東京大学出版会、1972
加藤伸行「明治中期～第一次大戦期京都府における蚕糸同業組合と府勧業行政」『日本史研究』2010
加藤伸行「明治中期における蚕糸業規制の導入と関西蚕糸業」『社会経済史学』2013
加藤伸行「明治中期西日本地域における養蚕伝習所の活動と養蚕技術」『歴史と経済』2013
栗田敦「明治後期～大正初期における府県の同業組合政策―愛知県の絞産業を事例として―」『歴史と経済』2021

表紙の解説

	1　2　3
5	4
（裏）	（表）

1　「まるまる舞鶴」WEB
2　日下安左衛門宅家相図（部分、木船衛門家文書 17-233）
3　舞鶴地方史研究会との共同調査　長谷川巴南撮影
4　東舞鶴港俯瞰（多祢山からの展望）　松岡秀雄氏撮影
5　東舞鶴高校での授業風景　長谷川巴南撮影

京都府立大学文化遺産叢書（2008 ～　京都関係）

1　南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究
3　八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図 : 地域文化遺産の情報化
4　八幡地域の古文書・石造物・景観 : 地域文化遺産の情報化
5　丹後・宮津の街道と信仰
6　城陽市域の地域文化遺産 : 神社・街道の文化遺産と景観
9　和束地域の歴史と文化遺産
10　石清水門前寺院・南山城地域の古文書 : 京都府歴史資料の調査
11　舞鶴地域の文化遺産と活用
12　「丹後の海」の歴史と文化
14　舞鶴・京丹後地域の文化遺産
16　舞鶴の地域連携と世代間交流 : 井上奥本家文書調査報告
18　京都東山・三嶋神社文書調査報告
19　京都雲ヶ畑・波多野六之丞家文書調査報告
20　綾部地域における文化資源の発掘と継承
21　京都山伏山町文書調査報告
22　あのころの雲ヶ畑 : 京都雲ヶ畑写真資料調査報告
23　文化財の保存活用と地域コミュニティ
26　京丹後市久美浜町太刀宮文書（久美浜代官所郡中代文書）・佐治家資料調査と御用留横断研究
27　君尾山光明寺文化財調査報告・由良神社文化財調査報告
28　夜久野の後期古墳と末窯跡群

京都府立大学文化遺産叢書　第 30 集

舞鶴木船衛門家文書調査報告
京都府北部 MALUI 連携事業

編　集　　東　　昇
発　行　　京都府立大学文学部歴史学科
〒 606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日　　2024 年 3 月 31 日
印　刷　　株式会社サンエムカラー
〒 601-8371 京都市南区吉祥院嶋樫山町 37